聖霊降臨後第 9 主日（特定 11）　マルコ 6 章 30―44 節

［新共同訳］

30さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。

31イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。32そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。

33ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。34イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。

35そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。36人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買いに行くでしょう。」37これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。38イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」

39そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。40人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。41イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。42すべての人が食べて満腹した。43そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。44パンを食べた人は男が五千人であった。

①構成

ⓐ 6 章 7―13 節では、十二人が宣教へと派遣されたことが述べられ、14―29 節では弟子たちの不在の間を埋めるかのように、ヘロデ王による洗礼者ヨハネの殺害という挿話が述べられている。30 節では、宣教に派遣されていた弟子たちの帰還と報告が語られる。

ⓑ 31―32 節では、人里離れた場所で休むようにとのイエスの指示とその実行が語られる。「人里離れた場所」と「自分たちだけで（あなたがただけで）」が繰り返され、強調されている。

Ⓒ 33―34 節では、懸命にイエスを追いかける群衆の熱気と、それに対するイエスの「深い憐れみ」とが描かれる。群衆はイエスと弟子たちが去って行くのを「見て」行動を始めるが、イエスも大勢の群衆を「見て」深く憐れみ、教え始める。群衆とイエスの行動が対応するように描かれてい

る。イエスの憐れみは人里離れた場所での神との交わりから来る憐れみである。

ⓓイエスが教え始めてから、時がだいぶ過ぎたとき、弟子たちは食べる物がないことを心配し始める。弟子たちは群衆を解散させることを主張するが、イエスは「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と命じる。「人里離れた場所」について、イエスと弟子は異なる考えを持っている。

ⓔわずかなパンと魚しかない絶望的な状況が変えられて行く。それは弟子と群衆がイエスの言葉に従うことから始まる。イエスの憐れみが、五千人もの人にパンを豊かに振る舞わせる。

②遣わされた者たちの帰還（30節）

ⓐ遣わされた者たちはイエスのもとに集まる

7節でイエスが派遣した者たちが戻ってきて、自分たちが行い、教えた「すべて」をイエスに報告した。ここでの「使徒（アポストロス）」は特別な地位にある弟子を指す述語としてではなく、単純に「遣わされた者」の意味で使われている。

ⓑ「使徒（アポストロス）」

この語はルカ文書で34回、パウロ書簡で24回使われているが、マタイでは1回（一〇2）、マルコでは2回しか用いられていない（三14、六30）。これに対して、「十二人（ドーデカ）」はマタイで8回、マルコで11回使われている。用例から見ると、マタイ・マルコは「十二人」と呼ばれる弟子の一群が存在したことを伝えるが、それを「使徒」と呼ぶことがない、と見ることができる。また、パウロは「使徒」を十二人に限定せず、もっと広い集団を表すために用いている。「使徒」は最初から「十二人」に限定されていたのではなく、ルカによって導入された見方なのかもしれない。

③イエスの指示と弟子の出発（31―32節）

ⓐさあ、あなたたち自身が　自分たちだけで、人里離れた場所へ
彼らは立ち去った　舟で　人里離れた場所へ　自分たちだけで

㋐31節のイエスの指示に使われた「自分たちだけで、人里離れた場所へ」は、32節にも繰り返されている。このような繰り返しから分かるように、群衆から離れて「自分たちだけで、人里離れた場所」へ向かうことが、重要なテーマとされているのは明らかである。

㋑「さあ」は副詞であって、動詞ではない。そこで新共同訳は「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と訳している。しかし、34節から見ると、イエスも弟子たちと一緒に舟で渡っているはずである。ここでの「さあ」は「さあ、来なさい」というニュアンスであり、イエスの思いはすでに人里離れた所にあり、そこから弟子たちに「さあ、来なさい」と呼びかけているのだと考えることができる。

㋒その場合、「あなたたち自身が自分たちだけで」は、群衆から離れて「あなたたちだけで」ということであり、思いの上では人里離れた場所に到着してしまっているイエスのもとに群衆から離れて来なさい、の意味になる。

ⓑそして少しの間、休みなさい

㋐「休む」という言葉（アナパウオー）は、肉体的な休息を表して「休む・ゆっくりとさせる」を意味するだけでなく、喜びや慰めなどによって内面的な安らぎを与えることを表し「安心さ

せる・元気づける」という意味もある。弟子たちが休息を必要としたのは、食事をする暇もないほど大勢の人が押し寄せ、疲れたこともあるが、それだけではない。むしろ、神から力を受け「元気づけられる」ためである。弟子たちが休む「人里離れた場所」とは、イエスがそこで祈ったことに示されているように（一 35）、神との交わりが繰り広げられる場所だからである。

㋑カファルナウムで宣教を始めた翌朝、人里離れた所で神に祈ったイエスは、「ほかの町や村でも宣教する」ことが自分の使命であることを確認する。宣教から戻った弟子たちに人里離れた所へ行くように命じたのは、ただ食事をする余裕を与えるだけでなく、イエスと同じように祈り、神の国の宣教が何を目指すのかに思いを向けるためだと思われる。

④群衆の強い求めとイエスの対応（33―34 節）

ⓐ多くの者たちは見た、わかった、共に走った、先に来た

㋐イエスたちの出発を知った群衆の反応が四つの動詞によって表されている。イエスたちが去って行くのを「見た」群衆は、それと「わかって」、徒歩でそこへと「共に走り」、イエスたちよりも「先に来た」。三番目の「共に走った」は、大勢が一箇所をめがけて急いで集まることを意味するので、新共同訳は「駆けつける」と訳している。このように群衆の行動が「見て→わかって→共に走り→先に来た」というように、一連の動きとして描写されている。

㋑しかし、舟で出て行ったイエスたちよりも、徒歩で岸辺を走った群衆のほうが目的地に早く着いたとされるのは、奇妙である。ルカ 9 章 10 節以下は「…イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。群衆はそのことを知ってイエスの後を追った」と書いて、その不自然さを消している。マルコが不自然な描写をあえて行っているのは、イエスや弟子を追いかけ回す群衆の熱意を書きたいからだろう。イエスを追いかける一連の動作の描写も群衆の熱気を描くためである。

ⓑイエスは見た、深く憐れんだ、教え始めた

㋐この群衆の熱意に対するイエスの反応が三つの動詞で表現されている。舟から出たイエスは多くの群衆を「見て」、飼い主のいない羊のような彼らを「深く憐れみ」、多くのことを教え「始めた」。イエスの「見て→深く憐れみ→教え始めた」は、イエスを求めて押し寄せた群衆の熱気に対応している。イエスの深い憐れみは、導き手を持たない群衆に向かって流れ出る。

㋑旧約聖書では、指導者を失った民が「飼い主のいない羊」にたとえられる。エゼキエル 34 章 5 節では、民は「飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりぢりになった」と述べられている。羊は考古学的にも古くから飼育されていたことが証明されており、聖書時代には、山羊と共に小家畜群に属していた。山羊については野生のものと家畜化されたものへの言及があるが、羊は家畜としてのみ登場する。エゼキエル書が述べるように、羊は飼う者がいなければ、野の獣の餌食となってしまい、命を失う。イエスは、集まった群衆が命を求めてさまよう様を見て、深く憐れむ。

⑤人里離れた場所で生きる（35―38 節）

ⓐ弟子たちは食べる物がないことを心配し始める。弟子たちにとって「人里離れた所」は、大勢の群衆に食べさせることのできない場所である。生命を維持するために必要な食べ物を手に入れる

ことができないから、この場所は人が生きるには不適切だと弟子たちは考える。

ⓑそれに対して、イエスは「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と命じる。大勢の群衆に食べさせるには「パンを買う」しかないと考える弟子から見れば、イエスの命令は無理難題でしかない。そこで「わたしたちが買って来て、みんなに食べさせるのですか」と反論する。「パンは幾つあるのか。見て来なさい」と言われて、その数を確かめるが、「五つのパンと二匹の魚」はまさに絶望的な数である。しかし、「パンを買う」ことのほかに生きる道があることが、イエスによって示される。

⑥イエスの手から渡され続ける（39―44節）

ⓐ絶望的な状況は、「皆を組に分けて、青草の上に座らせるように」というイエスの指示に弟子が従うことから変えられていく。人々も弟子からイエスの指示を聞き、腰を下ろす。人里離れた場所、生きることのできない場所で、弟子をはじめ、多くの人々がイエスの言葉に従う。そのとき、イエスを囲む人々はそれまで体験したことのない神の力を見ることになる。

ⓑ取って、天を見上げて

パンと魚を手に取ったイエスは「天を見上げる」が、これは祈りの姿勢である。イエスが五千人にパンと魚を振る舞うための手段は魔術ではなく、祈りである。この祈りに示された父との深い交わりが奇跡を引き起こす。奇跡とは見えない神の力を目に見える形として現すものである。

ⓒイエスは祝福した、そしてパンを裂いた、そして弟子たちに与えていた

「祝福した」と「裂いた」は動作があったことを単純に描写する過去形（アオリスト）であるが、「与えていた」は動作の反復・継続を表す未完了過去形。新共同訳では、「与えていた」は「渡しては」と訳されている。これはパンがイエスの手から弟子の手へと「渡され続けた」ことを意味している。

ⓓ大勢の群衆が食べるにはとても足りない五つのパンと二匹の魚はイエスの手に置かれたとき、尽きることのない命の糧に変えられていく。41節では「取って、天を見上げて、祝福し、裂いて、与えていた…分配した」というように、イエスの行為に焦点が当てられる。イエスを通して人々に神の力が注がれるからである。

⑦貧しさを神の力によって生きる

ⓐ舟から上がったイエスは、まことの導き手を求める群衆の熱意に素早く反応し、「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ」、教え始める。イエスの憐れみは導き手を持たずにさまよう群衆へと注がれ、まずは「教える」という形で示される。しかし、マルコはここでイエスが何を語ったかについては語らない。神の国についてのイエスの教えは、わずかな食べ物で多くの人々を養う奇跡によって現わされる。民が生きることを願うイエスこそがまことの牧者、導き手である。

ⓑイエスは人里離れた場所でパンを振る舞う。人里離れた場所は命を寄せつけない所、人が生きることのできない場所である。しかし、イエスはこの厳しい場に身を置き、神に祈り、神の声を聞く。わずかな食べ物をイエスの手に渡し、イエスの手から受け直すとき、それは尽きることのない豊かさに変わる。イエスの奇跡は、人は貧しい現実から離れるのではなく、神との交わりの中で、神の力によって生きる者であることを知らせている。